

ヘンゼルとグレーテル

HANSEL UND GRETEL

グリム兄弟 Bruder Grimm

青空文庫

まずしい木こりの男が、大きな森の近くにこやをもつて、おかみさんとふたりのこどもとでくらしていました。ふたりのこどものうち、男の子がヘンゼル、女の子がグレーテルといいました。

しがなくくらしで、ろくろく齒にあたるたべものを、これまでもたべずに来たのですが、ある年、国じゆうが大きなきんで、それこそ、日日のパンが口にはいらなくなりました。木こりは、晩、寝^ね床^{どこ}にはいったものの、こののち、どうしてくらすかかんがえると、心配で心配で、ごろごろ寝がえりばかりして、ためいきまじりに、

おかみさんに話しかけました。

「おれたち、これからどうなるというんだ。かわいいそうに、こどもらをどうやってくわしていくか。なにしろ、かんじん、やしなつてやっているおれたちふたりの、くうものがないしまつだ。」

「だから、おまえさん、いつそこうしようじやないか」と、おかみさんがこたえました。

「あしたの朝、のつけに、こどもたちをつれだして、森のおくのおくの、木^こぶかい所まで行くのだよ。そこで、たき火をしてやって、めいめいひとかけずつパンをあてがって置いて、それなりわいたしたち、しごとのほうへすすぽぬけて行つて、ふたりはそつくり森の中においてくるのさ。こどもらにかえり道が見つかりつこ

ないから、それでやっかいがぬけようじゃないか。」

「そりやあ、おめえ、いけねえよ。」と、木こりがいました。

「そんなことあ、おれにはできねえよ。こどもらを森ん中へおきざりにするなんて、どうしたって、そんなかんがえになれるものかな。そんなことしたら、こどもら、すぐと森のけだものがでてきて、ずたずたにひつつあいてしまうにきまつてらあな。」

「やれやれ、おまえさん、いいばかりだよ。」と、おかみさんはいました。「そんなことをいつていたら、わたしたち四人が四人かつえ死にに死んでしまつて、あとは棺かん桶おけの板をけずつてもらうだけが、しごとになるよ。」

こうおかみさんはいつて、それから、のべつまくしたてて、

いやおうなしに、ていしゆを、うんといわせてしまいました。

「どうもやはり、こどもたちが、かわいそうだなあ。」と、ていしゆはまだいっていました。

ふたりのこどもたちも、おなかがすいて、よく寝つけませんでしたから、まま母が、おとつつあんにむかつていつていることを、そつくりきいていました。妹のグレーテルは、涙をだして、しくんしくんやりながら、にいさんのヘンゼルにむかつて、

「まあどうしましょう、あたしたち、もうだめね。」と、いいました。

「しッ、だまってグレーテル」と、ヘンゼルはいいました。「おさわぎでない、だいじょうぶ、ぼく、きつとよくやってみせるか

ら。」

こう妹をなだめておいて、やがて、親たちがねしずまると、ヘンゼルはそろそろ起きだして、うわぎをかぶりしました。そして、おもての戸の下だけあけて、こっそりそとへ出しました。ちようどお月さまが、ひるのようにあかるく照つていて、うちの前にしいてある白い小砂利が、それこそ銀貨ぎんかのように、きらきらしていました。ヘンゼルは、かがんで、その砂利じやりを、うわぎのかくしいっぱい、つまるだけつめました。それから、そつとまた、もどつて行つて、グレーテルに、

「いいから安心して、ゆつくりおやすみ。神さまがついていてくださるよ。」と、いいきかせて、自分もまた、床とこにもぐりこみま

した。

夜があげると、まだお日さまのあがらないうちから、もうさつそく、おかみさんは起きて来て、ふたりをおこしました。

「さあ、おきないか、のらくらものだよ。おきて森へ行つて、たきぎをひろつてくるのだよ。」

こういつて、おかみさんは、こどもたちめいめいに、ひとかけずつパンをわたして、

「さあ、これがおひるだよ。おひるにならないうち、たべてしまふのではないぞ。もうあととはなんにももらえないからよ。」と、いいました。

グレーテルは、パンをふたつともそっくり前掛の下にしまいま

した。ヘンゼルは、かくしにいっぱい小石を入れていましたからね。

そのあとで、親子四人そろって森へ出かけました。しばらく行くと、ヘンゼルがふと立ちどまって、首をのぼして、うちのほうをふりかえりました。しかも、そんなことをなんべんもなんべんもやりました。おとつつあんがそこでいいました。

「おい、ヘンゼル、なにをそんなに立ちどまって見ているんだ。うっかりしないで、足もとに気をつけろよ。」

「なあに、おとつつあん。」と、ヘンゼルはいいました。「ぼくの見ているのはね、あれさ。ほら、あすこの屋根の上に、ぼくの白ねこがあがっていて、あばよしているから。」

すると、おかみさんが、

「ばか、あれがおまえの小ねこなもんか、ありやあ、けむだしに日があたっているんじゃないか。」と、いいました。でも、ヘンゼルは小ねこんなか見ているではありません。ほんとうはそのまに、れいの白い小砂利こじやりをせつせとかくしから出しては、道におとしおとししていたのです。

森のまん中ごろまで来たとき、おとつつあんはいいました。

「さあ、こどもたち、たきつけの木をひろっておいで。みんな、さむいといけない。おとつつあん、たき火をしてやろうよ。」

ヘンゼルとグレーテルとで、そだをはこんで来て、そこに山と積みあげました。そだの山に火がついて、ぱあっと高く、ほのお

がもえあがると、おかみさんがいいました。

「さあ、こどもたち、ふたりはたき火のそばであつたまつて、わたしたち森で木をきつてくるあいだ、おとなしくまつているんだよ。しごとがすめば、もどつてきて、いっしょにつれてかえるからね。」

ヘンゼルとグレーテルとは、そこで、たき火にあたつていました。おひるになると、めいめいあてがわれた、パンの小さなかけらをだして食べました。さて、そのあいだも、しじゅう木をきるおのの音がしていましたから、おとつつあんは、すぐと近くでしごとをしていることとばかりおもっていました。でも、それはおのの音ではなくて、おとつつあんが一本の枯れ木に、枝をいわい

つけておいたのが、風でゆすられて、あっちへぶつかり、こっちへぶつかりしていたのです。こんなふうにして、ふたりは、いつまでもおとなしくすわって待っているうち、ついくたびれて、両方の目がとろんとしてきて、それなりぐつすり、ねてしまいました。それで、やっと目がさめてみると、もうすっかり暮れて、夜になっていました。グレーテルは泣きだしてしまいました。

「まあ、わたしたち、どうしたら森のそとへ出られるでしょう。」と、グレーテルはいいました。

ヘンゼルは、でもグレーテルをなだめて、

「なあに、しばらくお待ち。お月さまが出てくるからね。そうすればすぐと路がみつかるよ。」と、いいました。

やがて、まんまるなお月さまが、高だかとのぼりました。そこで、ヘンゼルは小さい妹の手をひいて、小砂利をおとしたあとを、たどりたどり行きました。小砂利は、吹き上がって来たばかりの銀貨ぎんかみたいに、ぴかぴか光って、路しるべしてくれました。ひとばんじゅうあるきどおしにあるいて、もう夜のしらしら明けに、ふたりはやつとおとつあんのうちにかえつて来ました。ふたりがおもてをこつこつとたたくと、おかみさんが戸をあけて出てきました。そして、ヘンゼルとグレーテルの立っているのを見ると、「このろくでなしめら、いつまで森の中で寝こけていたんだい。おまえたち、もううちにかえるのがいやになったんだとおもっていたよ。」と、いいました。

おとつつあんのほうは、でも、ああして子どもたちふたりつきり、おきざりにして来たものの、心配で心配でならなかったところでしたから、よくかえって来たといつてよろこびました。

そののち、もうほどなく、うちじゅうまた八方ふさがりになりました。こどもたちがきいていると、夜おそく、寝ながらおつかさんが、おとつつあんにむかつて、

「さあ、いよいよなにもかもたべつくしてしまったわ。天にも地にもパンが半きれ、それもたべてしまえば、歌もおしまいさ。こうなりやどうしたって、こどもらを追いだすほかはないわ。こんどは森のもっとおくまでつれこんで、もう、とてもかえり道のないからにようにしなきゃだめさ。どうしたって、ほかにわたした

ち助かりようがないからね。」

こんなことをいわれて、ていしゆは胸にぐつと来ました。そして、

（そんなくらいならいっそ、てめえ、しまいにのこったじぶんのぶりのひとかけを、こどもたちにわけてやっちゃうのがましだ。）と、かんがえました。

それでも、おかみさんは、ていしゆのいうことを、まるで耳に入れようとしません。ただもういきりたつて、あくぞもくぞなべたてました。それはたれだつて、いったん^{アー}Aといつてしまえば、あとはBと^{ベエ}つづけなければならなくなるので、このていしゆも、いちどおかみさんのいうままになつたからは、こんども、そ

のとおりにしなくてはならなくなりました。

ところで、こどもたちはまだ目があいていて、この話をのこらずきいていました。そこで、おとなたちの寝てしまうのを待ちかねて、ヘンゼルはおきあがると、そとへとび出して、この前のように小砂利をひろいに行こうとしました。でも、こんどは、おかみさんが戸に、ぴんと、じょうをおろしてしまったので、ヘンゼルは出ることができなくなりました。

ヘンゼルは、それでも、小さい妹をなだめて、

「グレーテル、お泣きでない。ね、あんしんしてお休み。神さまがきつとよくしてくださあるから。」と、いいきかせました。

あくる日は、朝っぱらからもう、おかみさんはやって来て、こ

どもたちを寢床ねどこからつれだしました。こどもたちは、めいめいパンのかけらをひとつずつもらいましたが、それはせんよりも、よけい小さいものでした。それをヘンゼルは、森へ行く道みち、かくしの中でぼろぼろにくずしました。そして、おりおり立ちどまつては、そのくずしたパンくずを、地びたにおとしました。

「おい、ヘンゼル、なんだって立ちどまつて、きよろきよろみているんだな。」と、おとつつあんがいました。「さつさとあるかないか。」

「ぼく、ぼくの小ばとを、ちゃんとみているんだよ。そら、屋根の上にとまつて、ぼくにさよならしているんじゃないか。」と、ヘンゼルはいいました。

「ばか。」と、おかみさんはまたいいました。「あれがなんでは
とномんか。あれは朝日が、けむだしの上で、きらきらしている
んだよ。」

ヘンゼルは、それでもかまわず、パンくずを道の上におとしお
として、のこらずなくしてしまいました。

おかみさんは、こどもたちを、森のもつともつとふかく、生ま
れてまだ来たことのなかったおくまで、引っぱって行きました。
そこで、こども、またじやんじやんたき火をしました。

そしておつかさんは、

「さあ、こどもたち、ふたりともそこにじつといればいいのだよ。
くたびれたらすこし寝てもかまわないよ。わたしたちは、森で木

をきつて来て、夕方、しごとがおしまいになれば、もどつて来て、いっしょにうちにつれてかえるからね。」と、いいました。

おひるになると、グレーテルが、じぶんのパンを、ヘンゼルとふたりで分けてたべました。ヘンゼルのパンは道にまいて来てしまいましたものね。

パンをたべてしまうと、ふたりは眠りました。そのうちに晩もすぎましたが、かわいそうなこどもたちのところへ、たれもくるものはありません。ふたりがやっと目をあけたときには、もうまつくらの夜になっていました。ヘンゼルは、小さい妹をいたわりながら、

「グレーテル、まあ待っておいでよ。お月さまが出るまでね。お

月さまが出りやあ、こぼしておいてパンくずも見えるし、それをさがして行けば、うちへかえられるんだよ。」と、いいました。

お月さまが上がったので、ふたりは出かけました。けれど、パンくずは、もうどこにも見あたりません。それは、森や野をとびまわっている、なん千ともしれない鳥たちが、みんなつついてもつて行ってしまったのです。それでも、ヘンゼルはグレーテルに、「なあにそのうち、道がみつかるよ。」と、いつていましたが、やはり、みつかりませんでした。夜中じゅうあるきとおして、あくる日も朝から晩まであるきました。それでも、森のそとに出ることができませんでした。それになにしろ、おなかですいてたまりませんでした。地びたに出ていた、くさいちこの実を、ほんの

ふたつ三つ口にただけでしたものね。それで、もうくたびれきつて、どうにも足が進まなくなつたので、一本の木の下にごろりとなると、そのままぐっすり寝こんでしまいました。

二

こんなことで、ふたりおとつあんの小屋を出てから、もう三日めの朝になりました。ふたりは、また、とぼとぼあるきだしました。けれど、行くほど森は、ふかくばかりなつて来て、ここらでたれか助けに来てくれなかったら、ふたりはこれなりよわりきつて、^{たお}倒れるほかないところでした。

すると、ちょうどおひるごろでした。雪のように白いきれいな鳥が、一本の木の枝にとまって、とてもいい声でうたっていました。あまりいい声なので、ふたりはつい立ちどまって、うつとり聞いていました。そのうち、歌をやめて小鳥は羽ばたきをする、ふたりの行くほうへ、とび立って行きました。ふたりもその鳥の行くほうへついて行きました。すると、かわいいこやの前に出ました。そのこやの屋根に、小鳥はとまりました。ふたりがこやのすぐそばまで行ってみますと、まあこのかわいいこやは、パンでできていて、屋根はお菓子^{かし}でふいてありました。おまけに、窓はぴかぴかするお砂糖^{さとう}でした。

「さあ、ぼくたち、あすこにむかって行こう。」と、ヘンゼルが

いいました。「けっこうなおひるだ。かまわない、たんとごちそうになろうよ。ぼくは、屋根をひとかけかじるよ。グレーテル、おまえは窓のをたべるといいや。ありやあ、あまいよ。」

ヘンゼルはうんと高く手をのぼして、屋根をすこしかいて、どんな味がするか、ためしてみました。すると、グレーテルは、窓ガラスにからだをつけて、ぼりぼりかじりかけました。そのとき、おへやの中から、きれいな声でとがめました。

「もりもり　がりがり　かじるぞ　かじるぞ。

わたしのこやを　かじるな　だれだぞ。」

子どもたちは、そのとき、

「かぜ かぜ

そうらの 子。」

と、こたえました。そして、へいきでたべていました。ヘンゼルは屋根が、とてもおいしかったので、大きなやつを、一枚、そつくりめくつてもって来ました。グレーテルは、まるい窓ガラスを、そつくりはずして、その前にすわりこんで、ゆつくりやりはじめました。そのとき、ふいと戸があいて、化けそうに年とつたばあさんが、しゅもく杖にすがって、よちよち出て来ました。ヘンゼ

ルもグレーテルも、これにはしたたかおどろいたものですから、せつかく両手にかかえたものを、ぽろりとおとしました。ばあさんは、でも、あたまをゆすぶりゆすぶり、こういいました。

「やれやれ、かわいいこどもたちや、だれにつれられてここまで来たかの。さあさあ、はいって、ゆつくりお休み、なんにもされやせんからの。」

こういつて、ばあさんはふたりの手をつかまえて、こやの中につれこみました。

中にはいると、牛^{ぎゆうにゆう}乳^{にゆう}だの、お砂糖^{さとう}のかかった、焼きまんじ

ゅうだの、りんごだの、くるみだの、おいしそうなごちそうが、テーブルにならばりました。ごちそうのあとでは、かわいいきれ

いなベッドふたつに、白いきれがかかっていました。ヘンゼルとグレーテルとは、その中にごろりとなつて、天国にでも来ているような気がしていました。

このばあさんは、ほんのうわべだけ、こんなにしんせつらしくしてみせましたが、ほんとうは、わるい魔女で、まじよこどもたちのくるのを知つて、パンのおうちなんかこしらえて、だましておびきよせたのです。ですから、こどもがひとり、手のうちに入^{はい}つたがさいご、さつそくころして、にてたべて、それがばあさんのなによりうれしいお祝い日になるというわけでした。魔女は、赤い目をしていて、遠^{とおめ}目のきかないものなのですが、そのかわり、けもののように鼻ききで、人間が寄^よつてきたのを、すぐとかぎつけま

す。それで、ヘンゼルとグレーテルが近くへやってくると、ばあさんはさっそく、たちのわるい笑い方をして、

「よし、つかまえたぞ、もうにげようたつて、にがすものかい。
。」と、さもにくてらしくいいました。

そのあくる朝もう早く、こどもたちがまだ目をさまさないうちから、ばあさんはおきだして来て、ふたりともそれはもう、まっ赤にふくれたほっぺたをして、すやすやと、いかにもかわいらしい姿で休んでいるところへ来て、

「こいつら、とんだごちそうさね。」と、つぶやきました。

そこで、ばあさんは、やせがれた手でヘンゼルをつかむと、そのまま小さな犬ごやへはこんで行って、ぴっしやり格子戸こうしどをしめ

きつてしまいました。ですからヘンゼルが、中でいくらわめきただけわめいてみせても、なんのやくにもたちません。それから、ばあさんは、またグレーテルの所へ出かけて、むりにゆすぶりおこしました。そうして、

「このなまけもの、さあおきて、水をくんで来て、にいさんに、なんでもおいしそうなものを、こしらえてやるんだ。そとの犬ごやに入れてあるからの、せいぜいあぶらぶとりにつとらせなきや。だいぶ、あぶらののつたところで、おばあさんがたべるのだからな。」と、わめきました。

こうきいて、グレーテルは、わあつと、はげしく泣き立てました。けれどなにをしたってむだでした。このたちのわるい魔女の

いいなりほうだい、どんなことでも、グレーテルはしなければなりませんでした。

こんなしだいで、きのどくに、たべられるヘンゼルには、いちばん上等なお料理ができました。そのかわり、グレーテルには、ザリガニのこうらが、わたったばかりでした。

まい朝まい朝、ばあさんは犬ごやへ出かけて行つて、

「どうだな、ヘンゼル、指をだしておみせ。そろそろあぶらがのつて来たかどうか、みてやるから。」と、わめきました。

すると、ヘンゼルはたべあましのほそっこい骨を、一本かわりに出しました。ところで、ばあさんはかすみ目しているものですから、見わけがつかず、それをヘンゼルの指だとおもつて、どう

してヘンゼルにあぶらがのつてこないか、ふしぎでなりませんでした。

さて、それから、かれこれひと月たちましたが、あいかわらずヘンゼルは、やせこけたままでした。それで、ばあさんも、とうとうしびれをきらして、もうこの上待ちきれないとおもいました。「やいやい、グレーテル。」と、ばあさんは妹の子にむかってわめきたてました。「さあ、さっさといつて、水をくんでくるのだ。ヘンゼルのこぞうめ、もうふとつていようが、やせていようが、なにがなんだつて、あしたこそ、あいつ、ぶつちめて、にてくつちまうんだからな。」

やれやれ、どうしましょう。かわいそうに、この妹の子は、む

りやり水をくまされながら、どんなにはげしく泣きじやくったことでしょう。

「神さま、どうぞお助けくださいまし。」この子はさけび声をあげました。「いつそ森の中で、もうじゅうにくわれたほうが、よかったわ。それだと、かえってふたりいっしょに死ねたのだもの。」

「やかましいぞ、このがきやあ。」と、ばあさんはいいました。「泣いたってわめいたって、なんにもなりやあしないぞ。」

あくる日は、朝っぱらから、グレーテルはそとへ出て、水をつぱいはった大鍋^{なべ}をつるして、火をもしつけなければなりませんでした。

「パンからさきにやくんだ。」と、ばあさんはいいました。「パンやきかまどはもう火がはいっているし、ねり粉もこねてあるしの。」

こういつて、ばあさんは、かわいそうなグレーテルを、パンやきかまどの方へ、ひどくつきとぼしました。かまどからは、もうちよろちよろ、ほのおが赤い舌を出していました。

「なかへ、はいこんでみなよ。」と、魔女はいいました。「火がよくまわっているか見るんだ。よければそろそろパンを入れるかな。」

これで、もし、グレーテルがなかにはいれば、ばあさん、すぐとかまどのふたをしめてしまうつもりでした。すると、グレーテ

ルは中で、こんがりあぶられてしまうところでした。そこで、これもついでにもりもりやってしまうつもりだったのです。でも、グレーテルは、いちはやく、ばあさんのはらの中を見てとりました。そこで、

「あたし、わからないわ、どうしたらいいんだか。中へはいるつて、どういうふうにするの。」と、いいました。

「ばか、このくそがちよう。」と、ばあさんはいいました。

「口はこんなに大きいじゃないか、目をあいてよくみろよ。このとおり、おばあさんだつてそつくりはいれらあな。」

こう言い言い、やつこら、はうようにあるいて来て、パンやきかまどの中に、首をつっこみました。ここぞと、グレーテルはひ

とつき、うしろからどんとつきました。はずみで、ばあさんは、かまどの中へころげこみました。すぐ、鉄の戸をぴんとしめて、かんぬきをかってしまいました。うおッ、うおッ、ばあさんはとてもすごい声でほえたけりました。グレーテルはかまわずかけだしました。こうして、罰^{ばち}あたりの魔女は、あわれなざまに焼けただれて死にました。

グレーテルは、まっしぐらに、ヘンゼルのいる所へかけだして行きました。そして、犬ごやの戸をあけるなり、

「ねえヘンゼル、あたしたちたすかってよ。魔女のばあさん死んじやつてよ。」と、さけびました。

戸があくと、とたんに、ヘンゼルが、鳥がかごとからとび出した

ように、ばあつととび出して来ました。

まあ、ふたりは、そのとき、どんなにうれしがって、首つ玉にかじりついて、ぐるぐるまわりして、そしてほぼずりしあつたことでしたか。こうなれば、もうなんにもこわがることはなくなりましたから、ふたりは魔女のうちの中に、ずんずんはいつて行きました。うちじゅう、すみからすみまで、しんじゆ真珠や宝石のつまつた箱だらけでした。

「こりや、小砂利こじやりよりずっとましだよ。」と、ヘンゼルはいつて、かくしの中に入れられるだけ、たくしこみました。すると、グレートテルも、

「あたしも、うちへおみやげにもつてくわ。」と、いつて、前掛

にいっぱいにしました。

「さあ、ここらでそろそろ出かけようよ。」と、ヘンゼルはいいました。「なにしろ、魔女の森からぬけ出さなくては。」

それで、二三時間あるいて行くうちに、大きな川の所へ出ました。

「これじゃあ渡れやしない。」と、ヘンゼルはいいました。「橋にも、いかだにも、まるでわたるものがないや。」

「ここには、渡し舟も行かないんだわ。」と、グレーテルがいいました。

「でもあすこに、白いかもが一わおよいでいるわね。きつとたのんだらわたしてくれてよ。」

そこで、グレーテルは声をあげてよびました。

「かもちゃん　かもちゃん　小がもちゃん、

グレーテルとヘンゼルが　来たけれど、

橋もなければ　いかだもない、

おまえの白い　おせなかに　のせてわたして　ください
な。」

かもは、さつそく来てくれました。そこで、ヘンゼルがまずの
つて、小さい妹に、いっしょにおのりといいました。

「いいえ。」と、グレーテルはこたえました。「そんなにのって

は、かもちゃん、とてもおもいでしよう。べつべつにつれてつてもらいますわ。」

そのとおり、このしんせつな鳥はしてくれました。それで、ふたりぶじにむこう岸に渡りました。それから、すこしまたあるくうち、だんだんだんだん、森が、おなじみのけしきになって来ました。そしてとうとう、遠くの方に、おとつつあんのこやをみつめました。さあ、ふたりはいちもくさんに、かけだしました。ぽんとおへやの中にとびこんで、おとつつあんの首根っこにかじりつきました。

この木こりの男は、こどもたちを森の中に置きざりにして来てからというものの、ただのときでも、笑える時がなかったのです。

ところで、おかみさんも死んでしまっていました。

グレーテルは、前掛をふるいました。すると、真しんじゆ珠と宝ほうせき石

が、おへやじゅうころがりだしました。こんどは、ヘンゼルが、かくしに片手をつつこんで、なんどもなんどもつかみだしては、そこにばらまきました。

まずこんなことで、心配や苦労はきれいにふきとんでしまいました。親子三人それこそうれいずくめで、いっしょになかよくくらししました。

わたくしの話もこれで市がさかえました。ほら、あすこに、小ねずみがちよろちよろかけていますね。たれでもつかまえた人は、あれで、大きな毛皮のずきんを、ごじぶんでこしらえてごらん

さい。
い。

青空文庫情報

底本：「世界おとぎ文庫（グリム篇）森の小人」小峰書店

1949（昭和24）年2月20日初版発行

1949（昭和24）年12月30日4版発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

入力：大久保ゆう

校正：浅原庸子

2004年6月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ヘンゼルとグレーテル

HANSEL UND GRETEL

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 グリム兄弟 Bruder Grimm

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>